

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K19953

研究課題名(和文) 布施が結ぶ社会：『マハーバーラタ』第13、14巻の研究

研究課題名(英文) Socio-Religious Implications of Donation: A Study of Books 13 and 14 of the Mahabharata

研究代表者

高橋 健二 (Takahashi, Kenji)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教

研究者番号：30963227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、古代インド叙事詩『マハーバーラタ』の第13、14巻の読解を通して、その編纂時期(BC2C-AD4Cごろ)における布施の社会的役割を考察することである。本研究では、第14巻における布施に関する言説の当初の主眼は、バラモンの王族に対する優位性を示し、バラモンが宗教的権威として君臨するべきであるというイデオロギーを頒布させることにあることを明らかにした。また第14巻では、布施について自身の所有欲を克服するためであるという意味付けも行われる。さらに第14巻に先行する第13巻の諸教説は、第14巻におけるバラモンの優位性、克己としての布施といった議論と関連が深いことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、先行研究では雑多な諸説の寄せ集めであると理解されてきた『マハーバーラタ』第13、14巻について、王族が社会の実質的支配を行うものの、バラモンが宗教的権威を独占するという概念、そしてバラモンと王族との関係を媒介するものとしての布施という概念が通底していることを示したこと、そして第13巻と第14巻の関連性を明らかにしたことにある。また本研究の社会的意義は、近年ゲームやアニメなどで『マハーバーラタ』やインド神話が注目されつつあるものの、信頼できる書籍や論文等が不足している現状において、『マハーバーラタ』に関する文献学的研究の最前線の研究水準を示した点にある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the present study is to analyze the socio-political meaning of donation through a critical reading of Books 13 and 14 of the ancient Indian epic Mahabharata (BC 2C-AD4C). I have demonstrated that the original intention of the discussions found in Book 14 lies in showing priests' superiority over kings, and in promoting the ideology that kings should donate their wealth to priests to maintain the religious hierarchy in which kings rule their subjects under supervision of priests. Book 14 further promotes donation to kings as a practice of self-control over their greed.

Book 13 has been understood as a continuation of the discussions found in its preceding Book 12 in previous studies, but I have demonstrated that discussions found in Book 13 echo with those on the superiority of priests over kings and donation as self-control in Book 14.

研究分野：印度哲学・仏教学

キーワード：マハーバーラタ 布施 バラモン教 ヒンドゥー教 馬祀祭の巻 教説の巻

1. 研究開始当初の背景

[本研究における問い]

古代南アジア叙事詩『マハーバーラタ』(以下 MBh) は全 18 巻、約 7 万 5 千詩節からなる長大な作品で、批判校訂版では、本欄二段分の分量にも及ぶ。その特徴は、核となる英雄物語に、さまざまな教説、神話や物語などが挿入されていることである。MBh には、なぜこのように多くの教説や逸話を吸収するほどの求心力があったのか。また後述するように MBh の編纂期(BC2C 半ば~AD4C 末頃)は、南アジアの社会のあり方が大きく揺れ動いた時期であったと考えられるが、MBh に携わったと思われる祭官たちは、どのような理想の社会を思い描き、MBh に収められているような社会思想的教説を展開したのだろうか。そしてその社会思想は、MBh 以後の南アジア社会の形成にどのような影響を与えたのだろうか。

[MBh の物語の概略]

互いに親戚同士であるカウラヴァ族と パーンダヴァ族が未曾有の大戦争を繰り広げた後、戦いに勝利したユディシュティラは、親族たちを殺してしまった罪悪感から悲しみに沈む。カウラヴァ・パーンダヴァ族の長老ビーシュマが、死の床でユディシュティラの悲しみを取り除くために説いた教えが第 12 巻「平安の巻」と第 13 巻「教説の巻」である。その内容は多岐にわたるが、第 12 巻では統治の法、危急時の法、解脱の法が、第 13 巻では布施の法がそれぞれ主に説かれる。そして第 14 巻では、ユディシュティラが戦時に犯した親戚殺しの罪の贖いとして、祭官への大規模な布施を伴った馬祀祭という王権儀礼が行われる。しかし馬祀祭の終了後、半身が黄金のマンガースが現れ、以前落ち穂拾いを実践するブラーフマナが与えたなけなしの布施に彼の半身が触れることで、彼の半身は黄金になったので、彼はユディシュティラの布施に触れると残りの半身も黄金になると考えてやってきたが、結局残りの半身は黄金になることはなかったと述べ、マンガースはユディシュティラを非難する。ユディシュティラの馬祀祭にどのような瑕疵があったのかは、マンガースの物語においては議論されていない。しかし第 14 巻では、この問題について、異なる登場人物によって様々な見解が提示される。また第 13 巻でも、布施と布施の受領者としての祭官の役割が活発に議論されている。

[MBh 編纂の歴史的背景とその意義]

古代南アジアでは、祭式を司る祭官が宗教的権威として君臨するのが理想の社会であるとされ、MBh の時代には、仏教やジャイナ教などの新興宗教の登場し、さらに時の王権がそれを支持したことによって、祭官階級がその宗教的権威を失い始めていた。MBh は主に祭官階級によって編纂されたと考えられるが、その物語やそこに見られる言説には、新興宗教に対抗しつつ、新しい社会体制を提示しようという試みが見られる。

MBh はいくつかの編纂過程を経て現在に見る形になったと思われるが、第 13、14 巻で展開されている議論もそれぞれ論点や主張が微妙に異なっており、異なる編者によって段階的に挿入されたものであると思われる。本研究ではこれらの異なる議論は、激動の時代において MBh 編纂を担ったバラモンたちが、社会がどのようにあるべきなのか、バラモンと王族はどのような社会関係を結ぶべきなのかについて思想的試行錯誤を行なったゆえの結果であると捉え、その意義を検証する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ユディシュティラの馬祀祭および祭官への布施にどのような瑕疵があったのか、布施はどのようにあるべきなのか、について第 13、14 巻で展開されている議論を整理することで、その議論の相違から、布施という王と祭官階級を結ぶ社会的行為についてどのような思想的試行錯誤があったのかを分析することである。

3. 研究の方法

本研究では以下の二つの研究課題を設定することで、上記の研究目的を達成することを目指す。

[研究課題 1: 第 14 巻における布施の研究]

ユディシュティラが行った布施について、異なる登場人物によってどのような見解が提示されているのかを分析する。具体的には、ヴェーダ祭式学に基づいてユディシュティラに助言を与えるヴィヤーサ、ユディシュティラの祭式を否定するマンガース、マンガースの物語について肯定的な見解と否定的な見解両方を提示するヴァイシャンパーヤナ、そして布施を、所有欲を捨てる

克己の実践として説くクリシュナの見解を整理する。また特に第 13 巻をはじめとする MBh の他の部分や同時代の文献との影響関係を検証する。

[研究課題 2: 第 13 巻における布施および王権観の研究]

第 13 巻の特徴として、祭官階級の他の社会階級に対する優位性を説き、布施の受領者として祭官が最も適していることを強調することが挙げられる。第 13 巻の議論が第 14 巻の布施に関する議論のどの部分と関連づけられているのか、また同時代の法典文献と比較しながら、第 13 巻の特徴を検証し、論考を発表する。第 13 巻の批判校訂版は、他の巻に比べて使われている写本系統に偏りがあり、復元されたテキストには問題がある。批判校訂版では用いられていない、重要な古写本を所蔵する南アジア各地の文書館に赴き、写本の電子複写を入手し、テキストを適宜訂正する。

4. 研究成果

上述の研究課題 1, 2 についてのそれぞれの成果は以下の通りである。

[研究課題 1: 第 14 巻における布施の研究]

第 14 巻では、ユディシティラ王が行った布施が、落穂拾いによって清貧の生活を送るバラモンによる布施と対比されるが、第 13, 14 巻において、ユディシティラおよび落穂拾いを行うバラモンについて様々な異なる評価がなされる。「『マハーバーラタ』における落穂拾いの実践」では、ユディシティラとバラモンが対比される当初の意図はバラモンの王族階級に対する優位性を示すことにあったことを示し、後代の挿入と思われる部分において、無私無欲の精神に基づいて布施を行うことや、バラモンの宗教的権威を前提として王族が社会を支配するといった概念が含意されるようになったことを示した。

また第 14 巻の主筋は、大戦争の後自身の親族殺しの罪を清めるために、大規模な布施を伴う馬祀祭を行うというものであるが、その内容は、親族殺しを行なったことへの悲しみを癒すために、水供養を行い、ピーシュマの教説を聞くという第 12 巻と内容的重複が見られることから、先行研究では第 12 巻の方が成立が早いとされてきたが、学会発表「『マハーバーラタ』第 12-14 巻成立史再考」ならびに論文“The Double Cleansing of Yudhiṣṭhira’s Sorrow/Sin: A Study of the *Śāntiparvan* and the *Āśvamedhikaparvan* of the *Mahābhārata*”では、MBh 最古の巻号リストにおいて両巻が言及されていること、ならびに両巻の内容には若干の違いが認められることから、両巻について現段階では前後関係を確定させることはできないことを示した。

[研究課題 2: 第 13 巻における布施と王権観の研究]

第 13 巻では様々な布施の議論が展開されるが、先行研究では第 13 巻における布施の議論は、第 13 巻に先行する第 12 巻における諸説を敷衍したものであると考えられてきた。研究課題 1 の成果をもとに学会発表“What Can We Learn from the *Mahābhārata*? Outsiders, Kingship, Priesthood and the Making of the Hindu World”では、第 13 巻の内容はむしろ第 14 巻における落穂拾いに関する諸問題、特にバラモンの王権階級に対する優位性や、王族階級による、無私無欲の精神に基づいたバラモン階級への布施といったテーマとのつながりが深いことを示した。

また第 13 巻に見られる王権観の一例として、論文“*Draupadī’s Polyandry Revisited*”では MBh の主人公の一人であるドラウパディーと移り行く王権の繁栄を象徴するシュリー女神との関連性を取り上げた。ドラウパディーはユディシティラをはじめとする五人兄弟と結婚するが、ヒンドゥー教社会では一妻多夫制は認められておらず、ドラウパディーの婚姻形態は MBh 解釈上の問題点とされてきた。第 13 巻をはじめとする MBh 教説部分では、シュリー女神は移り行く王権の繁栄を象徴し、さまざまな支配者に共有されるものであるとされ、さらに MBh ではドラウパディーはシュリーの化身であるとされる。本論文ではドラウパディーをシュリーと関連づけられる文脈では、ドラウパディーが王族であるパンドヴァ五兄弟に共有されるのは、王権が複数の支配者に共有されるものであるためと理解されていることを指摘した。

第 13 巻の批判校訂版は、他の巻に比べて使われている写本系統に偏りがあるため、本研究では特に南アジア北西系のシャーラダー系写本、ならびに未出版の MBh 注釈書写本の収集・校合を行なった。スリナガルの SPS 図書館、SPS 美術館所蔵のシャーラダー系写本は数百年前の写本ではあったが、現存写本と比べて資料的価値は低いことが判明したが、ベナレス・ヒンドゥー大学所蔵のシャーラダー系写本は既知の写本系統とは異なる読みを示すことがあり、今後も本写本の研究を継続する予定である。またバンダルカル東洋文化研究所では、未出版の MBh 注釈書であるアルジュナミシュラ注ならびに『マハーバーラタ難解詩節註解』の写本をそれぞれ取得した。これらの MBh 注は特に難解な部分の解釈に有用であり、今後必要箇所について校訂本を出版する予定である。

また写本研究の過程で MBh 写本に関する先行研究の批判的検討も行なった。論文「『マハーバーラタ』インド南方伝承に関する研究動向：Mahadevan 説についての覚書」では、紀元後 1 千年紀前半から半ばにかけて、バラモンが北インドから南インドに移住したのに合わせて、MBh が北インドから南インドへ伝承されたという Mahadevan 説について、年代論に問題があること、特定のバラモン集団と写本伝承との関係性が希薄であること、文字系統による写本分類に問題

があることを指摘した。

[総括]

第 14 巻における布施に関する言説の当初の主眼は、バラモンの王族に対する優位性を示し、布施の対象としてバラモンが相応しいことを示すとともに、王族に社会的な権威や支配権は認めつつも、宗教的権威についてはバラモンが独占するというイデオロギーを頒布させることにあったことがわかった。第 13 巻の諸説は、特にバラモンの優位性を説くものが多いが、これらの諸説は第 14 巻におけるバラモンの優位性に関する議論を補強するために挿入された可能性が高いことがわかった。先行研究では、第 13 巻はそれに先行する第 12 巻のテーマとの関連性が注目されてきたが、第 13 巻の内容はむしろ第 14 巻との関連性において理解すべきであると思われる。

第 14 巻で論点が分かれるのは、布施にはどのような意味があるのかという点である。第 14 巻は、単にバラモンが王族より優れているために、王族はバラモンに対して布施を行わなければならない、としているわけではない。第 14 巻では布施を自身の所有欲に打ち勝つことであると捉え、克己の実践として布施を推奨する。これは修行や苦行などによって克己や欲望の制御を説いた、仏教などの新興宗教に対抗する教えとして意図されていた可能性が高い。

[その他]

論文「『マハーバーラタ』の神話的構造をめぐって：沖田瑞穂著『マハーバーラタ、聖性と戦闘と豊穡』みずき書林（2020）書評論文（1）」ならびに川村悠人氏との共著論文「カルナとアルジュナ、そして『マハーバーラタ』研究のこれから：川尻道哉『カルナとアルジュナ-『マハーバーラタ』の英雄譚を読む』書評論文」では、それぞれ新刊書に対して批判的検証を行なった。両論文では、特に MBh 関連については日本語で読める資料に限られていることに鑑み、現在の MBh 研究の紹介も合わせて行なった。

[アウトリーチ活動]

アウトリーチ活動の一環として本研究で扱う MBh の内容を紹介した。連続講座「連続講座 ヨーガの歴史をたどる！」ならびに講座「ヨーガってなーに？ほとんどの日本人が知らないちょっとディープなヨーガの話」では、MBh 教説群をはじめとするヨーガ文献の歴史を概観し、ヨーガがどのようにして生まれ、発展していったのかを紹介した。

また、シンポジウム発表「『マハーバーラタ』の口頭伝承的特徴について」およびオープンセミナー発表「『マハーバーラタ』写本研究の最前線」では、MBh の文献学的研究および写本研究の手法や問題点、これからの課題について紹介を行なった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 高橋 健二、川村 悠人	4. 巻 21
2. 論文標題 カルナとアルジュナ，そして『マハーバーラタ』研究のこれから：川尻道哉『カルナとアルジュナ？『マハーバーラタ』の英雄譚を読む』書評論文	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 比較論理学研究	6. 最初と最後の頁 65～112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/55158	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kenji Takahashi	4. 巻 72 (3)
2. 論文標題 The Double Cleaving of Yudhisthira's Sorrow/Sin: A Study of the Santiparvan and the Asvamedhikaparvan of the Mahabharata	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Indian and Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 973-978
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kenji Takahashi	4. 巻 34/35
2. 論文標題 The "Mental" (Manasa) Self and Manasa the Creator in the Bhrgubharadvajasamvada (Mahabharata 12.175-185)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Indological Studies	6. 最初と最後の頁 15-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋 健二	4. 巻 18
2. 論文標題 『マハーバーラタ』の神話的構造をめぐって：沖田瑞穂著『マハーバーラタ、聖性と戦闘と豊穡』みずき書林（2020）書評論文（1）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南アジア古典学	6. 最初と最後の頁 121-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kenji Takahashi	4. 巻 31
2. 論文標題 Draupadi's Polyandry Revisited	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Indian Philosophy and Buddhism	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋健二	4. 巻 2024
2. 論文標題 『マハーバーラタ』インド南方伝承に関する研究動向: Mahadevan説についての覚書	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 梶原三恵子編『インド語インド文学拾遺2024』	6. 最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計13件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Kenji Takahashi
2. 発表標題 What Can We Learn from the Mahabharata? Outsiders, Kingship, Priesthood and the Making of the Hindu World
3. 学会等名 Myth and Science in Ancient World: Novel Research from Eurasia (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kenji Takahashi
2. 発表標題 The Path to Paradise Begins in Hell: A Study of the 7th Chapter of the Sivadharmottara
3. 学会等名 The Conference of Heavens and Hells: Life after Death in Religious Traditions from South Asia (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋健二
2. 発表標題 『マハーバーラタ』第12-14巻成立史再考
3. 学会等名 第74回日本印度学仏教学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋健二
2. 発表標題 『マハーバーラタ』における落ち穂拾いの実践
3. 学会等名 北海道大学文学部での講演
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋健二
2. 発表標題 『マハーバーラタ』写本研究の最前線
3. 学会等名 HMCオープンセミナー
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 高橋健二
2. 発表標題 『マハーバーラタ』の口頭伝承的特徴について
3. 学会等名 公開シンポジウム「『マハーバーラタ』研究の最前線 伝承の形成と物語の展開」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Kenji Takahashi
2. 発表標題 Are the Teachings on Hell in the Sivadharmottara Saiva Enough? The Seventh Chapter of the Sivadharmottara and Its Anonymous Commentary
3. 学会等名 34. Deutcher Orientalistentag. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kenji Takahashi
2. 発表標題 Physiological Teachings of Yoga as Found in the Mahabharata
3. 学会等名 Online Lecture. University of London, School of Oriental and African Studies. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋健二
2. 発表標題 シヴァ教における地獄観：『シヴァダルモッタラ』第7章の研究
3. 学会等名 ブラフマニズムとヒンドゥイズムー南アジアの宗教と社会の連続性と非連続性 第9回シンポジウム 「インド宗教文化における『循環』の思想と表象」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 講演者：川村悠人、コメンテーター：高橋健二
2. 発表標題 (一般講座) ことばが力をもつ仕組み：祝詞、真言、陀羅尼
3. 学会等名 仏教サロン京都
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 講演者：林辰達、コメンテーター：高橋健二
2. 発表標題 「バカ」（馬鹿、莫迦）のルーツと仏教漢語の成立（講演者：林辰達）
3. 学会等名 仏教サロン京都
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 講演者：谷口力光、コメンテーター：高橋健二
2. 発表標題 あなたは誰の子？インド大叙事詩『マハーバーラタ』×古典ヒンドゥー家族法
3. 学会等名 仏教サロン京都
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋健二
2. 発表標題 ヨーガってなーに？ほとんどの日本人が知らないちょっとディープなヨーガの話
3. 学会等名 Yogiconline（オンライン講座）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Research Map https://researchmap.jp/kenji-indology Academia.edu https://unior.academia.edu/KenjiTakahashi Shivadharm Project https://shivadharmaproject.com

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Mapping Medieval Saiva Centres with non-Indic Materials	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------